

## 大学生の語彙の習得について

### — CELT の資料を中心にして —

広島大学 西 田 正

#### 序 論

言語学が規範から記述へと研究の視点を変えて、学問の科学性を高めたように、英語教育の研究にも対象を記述する実証的なフィールドワークが必要である。英語教育のあるべき理想像を求める前に、現状の活動を客観的に記述、分析し、その実態を把握することが、英語教育研究の科学性を高める上で、不可欠な要素であると思われる。

本稿は、大学生の語彙習得について実施した調査の報告である。大学の一般教養課程における英語教育に関する実態調査は、JACET (③) などによって公表されている。しかし、この種の報告書は、使用教材、教授法、履習方法などの、いわば、実態の形式的側面を扱い、大学生の英語学力のような実態の内面に触れる問題には立入っていない。大学の序列化の進行、大学間にある入学者の英語力の差、入学後の期待される到達度の差などが、大規模な調査を困難にしていると思われる。従って、各大学でまず、必要に応じて、大学生の英語力の実態調査を実施して、参考資料を提出することが、最も着実な方法であろう。

#### 大学生の語彙習得調査

##### 1) 目 的

語彙力は英語学力を構成する重要な要因である。本調査の目的は、教養課程で英語を学習する大学生の語彙習得状況を調査し、その一般的な傾向を探ることである。主な調査内容は次のようである。

- ① 大学生が習得している語彙のレベル
- ② 語彙習得のパターン
- ③ 語彙習得の傾向

##### 2) 方 法

###### ① 調査対象

広島大学総合科学部において教養英語を受講する大学生(8学部), 1年生347名, 2年生456名, 総計803名。

###### ② 調査実施期間

昭和55年(1980)から58年(1983)の4年間。各年度とも調査は5月中旬に実施した<sup>1)</sup>。

Word Frequency Ranking (T&L)	Test Words (%)	Test Items (%)
Fourth thousand	70 (25)	23 (30.7)
Fifth thousand	67 (24)	16 (21.3)
Sixth thousand	109 (39)	29 (38.7)
Seventh thousand	34 (12)	7 ( 9.3)
Total	280	75

③ 調査材料

CELT の Form V-A (語彙テスト) を使用した<sup>2)</sup> 同テストを構成する語彙 (test words) 280 語と正答として選ぶべき語彙 (test items) 75語の頻度レベルの内訳は表 1 の通りである。

3) 調査結果及び考察

4 年間に亘る各群の受験者数, 最高・最低点, 得点範囲, 平均点, SD は表 2 に示した。受験者総数 803 名の平均点は 48.19, 最高点は 97.00, 最低点は 19.00, SD は 11.86 であった。

表 2		Form V-A の結果					
1980	Ⓘ (N=57)	Ⓛe (N=24)	Ⓛj (N=20)	Ps (N=60)	Sel (N=57)	TOTAL N=218	
MAX	68.00	83.00	75.00	69.00	56.00		
MIN	20.00	48.00	37.00	20.00	19.00		
RANGE	48.00	35.00	38.00	49.00	37.00		
$\bar{X}$	44.63	64.63	53.50	47.05	40.54		
SD	9.47	9.76	8.57	10.63	9.00		
1981	Ⓜ (N=54)	Pj (N=31)	S (N=42)	Pe (N=27)	TOTAL N=154		
MAX	91.00	64.00	63.00	88.00			
MIN	41.00	23.00	19.00	29.00			
RANGE	50.00	41.00	44.00	59.00			
$\bar{X}$	60.19	52.23	43.02	59.81			
SD	11.65	8.77	8.74	12.84			
1982	Ⓜ (N=53)	Ⓘ (N=59)	Ⓜ (N=57)	T (N=44)	TOTAL N=213		
MAX	97.00	65.00	81.00	73.00			
MIN	35.00	20.00	24.00	25.00			
RANGE	62.00	45.00	57.00	48.00			
$\bar{X}$	56.60	43.71	51.35	44.30			
SD	12.20	9.15	11.36	9.48			
1983	Ⓛps (N=33)	Ⓘ (N=56)	Sj (N=43)	T (N=43)	Ⓛe (N=43)	TOTAL N=218	
MAX	88.00	68.00	67.00	64.00	59.00		
MIN	32.00	24.00	28.00	28.00	20.00		
RANGE	56.00	44.00	39.00	36.00	39.00		
$\bar{X}$	48.58	43.41	47.49	42.16	41.07		
SD	11.97	7.22	9.03	8.76	8.16		

TOTAL N=803    MAX 97.00    MIN 19.00    RANGE 78.00     $\bar{X}$ =48.19    SD=11.86

○印は 2 年生

① 学年間の比較

テスト実施時の 1 年生 (N=347,  $\bar{X}$ =46.05, SD=10.86) と 2 年生 (N=456,  $\bar{X}$ =49.83, SD=12.33) を比較すると, 平均点の差は 3.78 で, 2 年生が 1 年生より優位であった ( $t_0=4.53$   $P<.01$ )。しかし, 両群には専攻学部異なる学生が入っていたので, 一概に, 2 年生の方が 1 年生よりも習得語彙が多いとは言えない。

② 学部間の比較

語彙習得は専攻学部によって, 3 つの型に分類できる<sup>3)</sup> ①成績上位群 (語彙習得が比較的進んでいる群): 英語専攻群 (Ⓛe), Pe, 医学専攻群 (Ⓜ) (1981, 1982)。この 4 群間の平均点の差は  $F_0(3, 154) = 2.64$   $P<.05$  で有意であった。しかし, テューキー法の結果 (Ⓛe) と (Ⓜ)

(1982)の間に限って有意差が認められた。従って、このグループ内では、(Le)が語彙習得が最も進み、(M)(1982)が最も遅れている。②成績下位群(語彙習得が比較的遅れている群)：(I)(1980, 1982, 1983), Ps, Sel, S, T(1982, 1983), (Pps), Sj, (Sel)。このグループには、主に理科系と教員養成系(小学校)の学生が含まれている。③成績中位群(語彙習得状況が①群と②群のほぼ中間にある群)：(Lj), Pj, (J)。文科系学生がこの群を構成しており、群間の平均点の差は有意でない( $F_0(2, 105) = 0.34$   $P > .05$ )。

以上の語彙習得の型は、入学試験における英語のウェイトと一致している。つまり語彙習得の高い群は共通1次と2次試験の双方において英語が課せられているが、習得の低い群は共通1次の英語だけが求められている。

③ 同一専攻学部内での比較

例えば、(I)群では、1980年が $N=57$ ,  $\bar{X}=44.63$ ,  $SD=9.47$ , 1982年が $N=59$ ,  $\bar{X}=43.71$ ,  $SD=9.15$ , 1983年が $N=56$ ,  $\bar{X}=43.41$ ,  $SD=7.22$ である。この3群間の平均点の差は有意でない( $F_0(2, 169) = 0.30$   $P > .05$ )。また、他の群内でも、T群(1982 vs 1983)内では、 $t_0 = 1.55$   $P > .05$ , Sel群(1980 vs 1983)内でも、 $t_0 = 0.30$   $P > .05$ , さらに、(M)群(1981 vs 1982)内でも  $t_0 = 1.55$   $P > .05$  で、ともに平均点の差は有意でなかった。この結果から、専攻学部が同じであれば、かなり等質の語彙習得状況にある学生が入学し、大学で学習していることがわかる。

④ 他の英語学習者との比較

表3はアメリカ人高校生に、表4はアメリカ人以外の外国人にそれぞれ CELT を実施した結果である。本調査の英語上位群の中には母国語話者の語彙力に近い受験者(97点)もいたが、母国語話者の98.5%が95点以上の成績を得ているので、上位群と言えども母国語話者にはほど遠い。また、同群の語彙力はアメリカの大学に入学を許可されたA群や滞米中の外国人高校生E群にも及ばず、D群(5~7年間英語を学習した French-speaking Canadian の大学1年生)に近い。中位、下位群の語彙習得状況は、B群(アメリカの大学付属の英語訓練機関に在籍す

表3 Performance on CELT of 70 American High School Students

Test Scores	Listening		Structure		Vocabulary	
	N	%	N	%	N	%
96-100	51	73.0	62	89.0	64	91.5
91-95	16	23.0	8	11.0	5	7.0
86-90	3	4.0	-	-	1	1.5
Mean:	96.12		97.62		97.59	

(①-10)

表4 Mean Scores and Standard Deviations

Group	N	Listening test		Structure test		Vocabulary test	
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
A	155	80.94	14.80	76.74	16.03	74.71	18.13
B	60	62.76	12.98	54.91	15.40	44.23	15.16
C	65	59.76	14.12	52.96	13.16	43.43	15.13
D	122	75.74	19.24	64.25	21.00	62.79	15.00
E	75	85.60	15.36	79.29	19.11	73.72	22.96

(①-7)

る留学生)あるいは、C群(advanced levelのESLプログラムの受講生)の語彙力に匹敵する。

⑤ 語彙習得レベル

表5は各群の受験者がどのレベルの語彙に対してどの程度正しく反応できたかを示している。また図1～4はその結果をグラフ化したものである。それによれば、例えば、1980年の(Le)群は、4,000語レベルの語彙には75.83%、5,000語レベルには65.25%、6,000語レベルには60.97%、7,000語レベルには49.71%の割合で正しく答えられたことがわかる。まず、語彙習得の全体的傾向として、テスト時の受験者の学年と専攻の如何に関わらず、語彙レベルの上昇につれて習得率が落ちてくるのが指摘できる。比較群の中には、5,000語から6,000語レベルでわずかな上昇傾向が見られる群があるが、その率は無視できる程度である。

成績上位群は、4,000語レベルの語彙を70%以上習得しているのに対して、下位群では、50%の習得率に留まっている。両群の分岐点は4,000語レベルですでに始まっている<sup>4)</sup>さらに、下位群の4,000語レベルの習得率は上位群の5,000語レベルの習得率とほぼ同じである。従って、両群間の習得語彙には少なくとも1,000語程度の差があると推測できるであろう。一方、どの成績群でも5,000語と6,000語の習得率はほぼ平行線をたどっているので、大学生にとっては、5,000語レベルの語彙と6,000語レベルの語彙は同じ難易度であると予想できる。

調査した4年間に見られる語彙習得の変動は、大学生の語彙力が低下して来たことである。特に図4が示すように、1983年では専攻学部群間の差が著しく減少し、専攻学部に関係なく類似した語彙習得状況にある大学生が増加している。比較する学部が一定していないので断定はできないものの、大学生の語彙力の総体的な低下と英語学力の均一化という日頃の経験から受

表 5

語彙レベルと正答率

年	群	4,000	5,000	6,000	7,000
1980	(Le) (N=24)	75.83 (%)	65.25	60.97	49.71
	(Lj) (N=20)	61.96 (%)	53.12	48.97	42.86
	Ps (N=60)	56.53 (%)	48.74	41.17	34.29
	(I) (N=57)	56.86 (%)	48.14	42.48	38.84
	Sel (N=57)	50.27 (%)	37.41	38.24	29.07
1981	Pe (N=27)	73.42	55.80	56.69	48.13
	(M) (N=54)	70.04	58.91	56.32	47.10
	Pj (N=31)	65.21	42.54	48.28	44.23
	(S) (N=42)	53.53	38.84	40.40	35.38
1982	(M) (N=53)	70.56	50.71	54.45	46.63
	(J) (N=57)	64.86	46.94	48.83	40.61
	(I) (N=59)	59.78	40.00	39.36	39.00
	T (N=44)	55.23	42.34	39.89	37.66
1983	(Pps) (N=33)	59.06	48.23	45.44	42.93
	Sj (N=43)	56.22	47.84	43.63	33.94
	(Sel) (N=43)	51.50	40.30	37.70	32.95
	(I) (N=56)	51.40	44.60	40.81	29.84
	T (N=43)	49.90	43.90	40.93	31.70

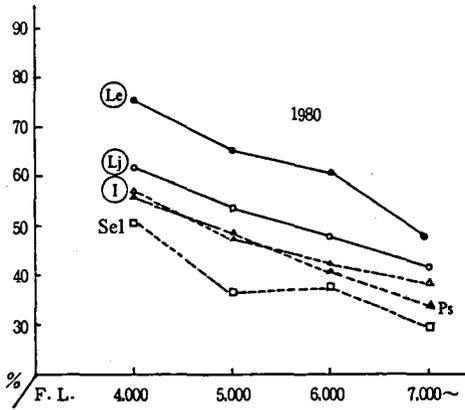


図 1

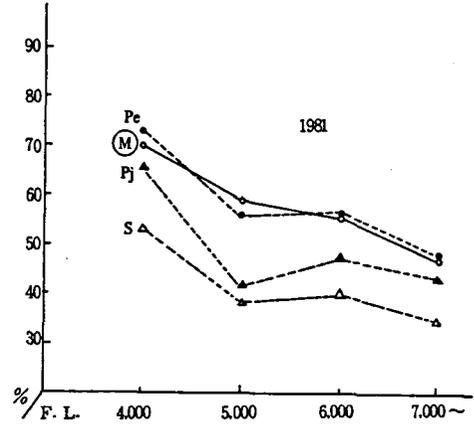


図 2

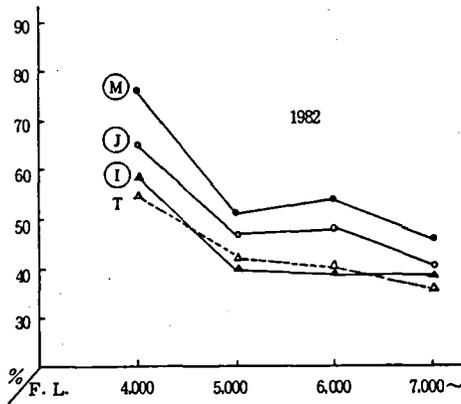


図 3

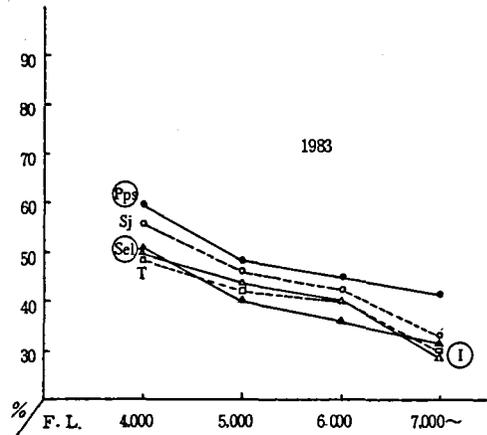


図 4

F.L.=Frequency Level  
%=正答率

の経験から受ける印象を裏付ける結果となった。

⑥ 語彙習得の相関性

テスト項目75について、各年度の平均正答率を算出し、テスト項目の難易度の順位づけをして、4年間の相関を求めた結果が表6である。それによると、

表 6

Kendall Rank Order Correlation Coefficients

	1980	1981	1982	1983	
1980	—	0.61**	0.77**	0.75**	
1981		—	0.68**	0.66**	
1982			—	0.78**	** p < .01
1983				—	

1982年と1983年の間の相関が最も高く ( $r_k = 0.78$   $P < .01$ ), 1980年と1981年が最も低い ( $r_k = 0.61$   $P < .01$ )。語彙テストの項目数が75であったことを考慮すると、この相関はか

なり高いと判断できる。すでに検討したように、大学生の語彙習得率は4,000語から7,000語レベルに至るに従って低下するので、語彙の難易度のこのような順位相関の結果は当然予想できた。しかし、ここにおいても大学生の語彙習得の一様性が見られる。

⑦ 語彙習得の具体的説明

調査年度別に平均正答率の高い上位20位までのテスト項目番号を表7に、低い下位20位までの番号を表8に、それぞれ挙げた。4年間を通して正答率(習得率)の高い語彙は表9に、また習得率の低い語彙は表10に示した。列挙した語彙には、Thorndike & Lorge(⑤)の語彙レベル、速川(②)の分類を標示し、全英連(⑥)、木下<sup>5)</sup>JACET(④)の語彙リストに該当語彙が含まれているか否かを明示した。習得率の高い語彙20の内訳は、4,000語レベルが8、5,000語レベルが4、6,000語レベルが7、7,000語レベルが1である。速川の区分では、aレベルが1、bレベルが4、cレベルが9、dレベルが5、同リストにない語が1である。この習得率の高い語群20の中で5語が全英連に、4語が木下に、11語がJACETに含まれていない。一方、習得率の低い20の語群の内訳は、頻度の低い語が多く、全英連などの語彙表に含まれていない語が多い。すなわち、4,000語レベルが2、5,000語が4、6,000語が11、7,000語以上が3である。速川リストによれば、bレベルが1、cが4、dが11、その他が4である。この語群中、15語が全英連に、8語が木下に、19語がJACETに、それぞれ含まれていない。以上の結果から、大学生の語彙習得状況は、語彙表の頻度レベルをかなり忠実に反映していると言える。その他表9と表10にみられる語彙の特徴をあげると、まず、習得率の高い語の一部は日本語の中に入っている。例えば、習得率が最も高い‘panic’はT&Lでは4,000語、速川ではdに分類されている。速川調査時にくらべて‘panic’は一層日本語化している。その他日本語化していると思われる語に、‘summit’、‘flake’がある。習得率が2位の‘chat’はT&Lでは6,000語レベルであるが、速川ではbランクに分類され、全英連その他の表にも含まれているので大学生には身近な語となっている。一方、習得率の低い語群には、‘plank’‘hurl’のような英米文化圏の生活語彙が入っている。また、木下の調査によれば、この20の語群中、12の語は高校の教科書に少なくとも一度は出ている語である。語彙の定着のむずかしさが感じられる。

表 7 年度別平均正答率上位 20 位

Rank	1980	1981	1982	1983
1	37 (4)	37	37	37
2	44 (6)	44	44	44
3	27 (4)	41	27	17
4	43 (4)	43	2	1
5	41 (6)	27	43	27
6	1 (4)	1	17	40
7	17 (5)	10	1	41
8	10 (5)	2	41	59
9	40 (5)	4	10	43
10	2 (4)	59	40	10
11	12 (4)	40	59	2, 15
12	59 (5)	50 (4)	16	
13	4 (7)	5	12	16
14	16 (4)	15	5	6
15	6 (6)	39 (4)	4	12
16	14 (4)	6		18
17	18 (5)		6	5
18	5 (6)	56 (4) 17	14 15	50
19	15 (6)	60	52 (5)	56
20	47	72 (6)	56	47

( ) の中は語彙レベル (4)= 4,000 語レベル

表 8 年度別平均正答率下位 20 位

Rank	1980	1981	1982	1983
75	8 (6)	8	8	23
74	20 (5)		25	8
73	63 (6)	25, 24	28	24
72	25	67	67	61
71	71	29	63	71
70	28 (6)		20	67
69	36 (5)	20, 28, 33	71	45
68	24 (6)	6	24	63
67	45 (7), 75 (6)	63	45	36
66	6 (6)	31	23	20
65	66 (6)	61	61	31
64	30 (7)	45	35	62
63	29 (5)	21	36	25
62	3 (7)	58	58	35
61		35	3	66
60	74 (7), 67 (4)	22	29	58
59	31 (6)	36	7 (5)	29
58	23 (6)		73	75
57	73 (6)	23, 71		3
56	61 (6)	3	30, 31	33

表 9 習得率の高い語彙(20位)

Item No.	Test Items	T&L	速川	全英連	木下	JACET
37	panic	4	d			
44	chat	6	b			
27	hum(med)	4	c		φ φ	φ
43	coward	4	c			
41	gigantic	6	d	φ		φ
1	survive(d)	4	b			
17	summit	5	c		φ	φ
10	reject(ed)	5	c			
40	nap	6	c			φ
2	legend	4	c			
59	stride	5	d			φ
4	drench(ed)	7	c	φ	φ	φ
16	growl	4	φ	φ		φ
6	blink	6	d	φ		φ
14	thorn(s)	4	c			φ
18	rust (v.)	5	b	Noun		φ
5	competing	6	a		φ	
15	flake	6	c			
47	fragrance	6	d	φ		φ
12	deaf	4	b			

φ= 該当語彙が含まれていない

表 10 習得率の低い語彙(20位)

Item No.	Test Items	T&L	速川	全英連	木下	JACET
8	ingredient(s)	6	d	φ		φ
28	rake (v.)	6	c			φ
20	wade(d)	5		φ	φ	φ
63	assail	6		φ	φ	φ
25	rash	7~	d			φ
71	lull (N.)	6	d	φ		φ
24	slam(med)	6	d	φ		φ
45	arduous	7~	d	φ		φ
67	plank	4	d	φ		φ
3	fragile	7~	c	φ	φ	φ
31	dough	6	φ	φ	φ	φ
23	stack(s)	6	c	φ		φ
36	granite	5	c	φ		φ
35	hurl	4	d	φ		φ
61	spade (N.)	6	d			
29	gnaw(ing)	5	d	φ		φ
58	lid	5	b		φ	φ
75	shrewd	6	d		φ	φ
73	folorn	6	φ	φ	φ	φ
66	ponder	6	d	φ	φ	φ

## 結論と今後の課題

以上のような調査結果を解釈する際に次の点に留意すべきである。まず第1は、統計的処理には被験者を無作為に抽出することが前提とされているが、本調査では大学生を無作為に選んだわけではない。その為、横断的にまた縦断的に比較する集団が不均等になった。しかし、無作為抽出法の実施には教授担当者の全面的な協力体制が必要である。第2点は、使用した *CELT Form V-A* のテストとしての信頼性と妥当性の問題である。Harris & Palmer (⑤: 8) によればこの語彙テストの信頼性は .97~.88 と報告されているが、本調査では .65 程度であった。また、日本人大学生の語彙習得を見るテストとしては少し程度が高かったかもしれない。しかし、このような本調査の不備や限界にもかかわらず、大学生の語彙習得の一般的傾向が指摘できたと思われる。語彙習得を質と量の両面から客観的に把握することは決して容易ではない。統計的処理はどちらかと言えば量的な把握に調査の主眼点があり、質的な深い考察には別の方法を併用すべきであろう。大学生へのアンケート調査や面接を実施して、学習経験、使用教材、関心、学習の動機づけなどに関する資料を収集する方法も、大学生の語彙習得状況を知る上で有益であるかもしれない。

### (注)

- (1) 筆者は昭和55年以来毎年受講生に *CELT* の *Form L-A* (聴解テスト), *S-A* (文法テスト), *V-A* (語彙テスト) を実施しているが、本稿では語彙テストの結果を報告する。
- (2) 同テストは多肢選択法の標準テストである。テストの得点は75問中の正答率で表わす。このテストを採用した理由は、テストの構成が Thorndike & Lorge (1944) の語彙リストに基づいており、各問の distractors は答えの語彙とほぼ同じレベルの語彙が選ばれているので、大学生の語彙習得レベルを予測する上で有役であると判断したからである。
- (3) この分類は統計的にかかわらずしも厳密とは言えない。例えば、成績上位群に入れた  $\textcircled{M}$  (1982)群と中位群に入れた  $\textcircled{Lj}$  群とは平均点の差が有意ではない ( $t_0 = 1.029$   $p > .05$ )。また、中位群の  $\textcircled{J}$  と下位群の  $\textcircled{Pps}$  群間にも平均点の有意差はない ( $t_0 = 1.08$   $p > .05$ )。従って、 $\textcircled{Lj}$  を上位群に、 $\textcircled{Pps}$  を中位群に分類することも可能であるが、この分類は語彙習得の一般的なパターンを検討するための便宜的な区分である。
- (4) JACET (1983) は大学生用の基本語の下限を約4,000語と定めている。本調査でも4,000語が成績の上位群と下位群を分ける分岐点になっているので、この語彙選定は一般大学生用として妥当であると思われる。
- (5) 木下徹氏は *Crown English Readers* (三省堂), *High Road to English Reading* (三省堂), *My English Readers* (旺文社), *New Horizon English Readers* (東京書籍), *Senior English Readers* (旺文社), *Unicorn English Readers* (文英堂), *The Vista English Readers* (三省堂) などの高校英語読本に使用されている語彙をコンピューター処理しているが、今回はこの語彙表を利用させてもらった。ここに氏に感謝の意を表わすとともに、語彙表の基礎となったプログラム LEX を開発した広島大学平和科学研究センターの松尾雅嗣助教授にも感謝する次第である。

### 〔引用文献〕

1. Harris, David P. and Leslie A. Palmer (1970) *CELT (A Comprehensive English Language Test for Speakers of English as a Second Language) Technical Manual* (McGraw-Hill Book Company)
2. 速川 浩 (1966) 『教科書に現われた英語単語の研究』(大修館)
3. JACET (大学英語教育学会) 編 (1981) 『大学一般教養課程における英語講読用教科書のあり方』
4. JACET 編 (1983) 『「英語講読用教科書のあり方」についてのアンケート調査報告一

『基本語第2次案』を中心に』

5. Thorndike, Edward L. and Irving Lorge (1944) *The Teacher's Word Book of 30,000 Words* (Teachers College Columbia University)
6. 全国英語教育研究団体連合会編 (1981) 『全英連高校基本英語単語活用集』 (改訂新版) (研究社)

※ 省略記号 I = 総合科学部, Sel = 学校教育学部 (小学校教員養成課程), Sj = 同学部 (中学校教員養成課程), J = 法学部, M = 医学部, T = 工学部, S = 理学部, Pps = 教育学部心理・教育学専攻, Lj = 文学部国語国文学専攻, Le = 文学部英語英文学専攻, Pe = 教育学部英語教育学専攻, Pj = 教育学部国語教育学専攻, Ps = 教育学部数学・理科・社会教育学専攻